

駿河湾の深海魚 (10)
ホシホウネンエソ (その 2)

久保田 正・佐藤 武

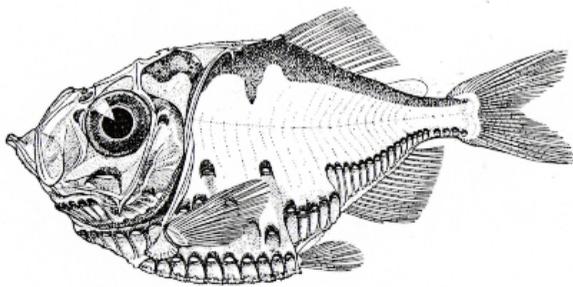


図 1. ホシホウネンエソと近縁なノコバホウネンエソ
松原 (1955) から引用

ホシホウネンエソの学名は、1961年にアメリカの魚類学者 Schultz, L. P. (1901 ~ 1986) によって熊野灘から得た標本に *Polyipnus matsubarai* と命名されました。この種小名は、京都大学農学部元教授であった松原喜代松博士に因んで付けられました。同博士は、日本の魚類学の発展に大きく貢献した魚類学者です。彼の著わした「魚類の形態と検索 Ⅰ～Ⅲ」(1955)は、1980年代の初めまで日本産魚類の同定に当たってはバイブル的な手引書でした。図1の魚は、同博士の上記の著書の表紙裏に描かれている本種と近縁なノコバホウネンエソ (*P. spinifera*) です。

前報 (第 45 号、p. 9) で述べたサクラエビと混獲された本種 300 個体の胃内容物の出現頻度を調べたところ、主要な餌生物は甲殻類プランクトンでした。それらを多い順にみると、カイアシ類、オキアミ類、^{たんぽくやく}端脚類、エビ類、^{かいらいせつ}貝形虫類などであり、特に目立っていたカイアシ類の属レベルで多い順に *Pareuchaeta*, *Euchaeta*, *Euchirella*, *Candacia* などの中・深層性種が多くみられ、これら以外に毛顎類や魚類の稚魚などは少数個体でした。これらの動物プランクトンは、本種の生息水深である 100 ~ 350m 付近で捕食されたと思われます。ムネエソ亜科に含まれるほかの種類の食性も、本種と同じように甲殻類プランクトンを餌料



図 2. ホシホウネンエソを描いたトレーナー
研究室の学生がデザインしたもの

としていることが知られています。

一方、ムネエソ亜科魚類に含まれる多くの種は小型個体ですが、外洋域ではカツオ、メバチやキハダなどのマグロ類、イルカ類、サバ類など多くの有用水族生物の主要な餌生物であることが知られています。本亜科の仲間たちは、中・大型魚類と動物プランクトンの中間の栄養段階に位置して海洋生態系の中でエネルギー伝達の中継者として重要な地位にあります。またこの仲間たちは、200m 以深で曳網したプランクトンネット採集物中にはハダカイワシ類やヨコエソ類に次いで多く見られます。

私が所属していた学部研究室のある学年の学生たちは、本種をモチーフにした図柄のトレーナーを作り、楽しんでいました。その作品を紹介します (図 2)。

またムネエソ亜科魚類は、体が強く側偏し発光器を有していること、さらに体側にある黒色帯の模様が種類によって違うことなどの特徴を併せ持っているため、これらの原型を失わずに種ごとにクッキーなどの焼き菓子を作ると、深海魚に興味をもっている子供たちに歓迎されると思います。この側偏した銀色で美しいメダルのような魚の標本を見るたびに思うのです。